
あの日世界は鮮明に――

龍呀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日世界は鮮明に――

【Nコード】

N7283G

【作者名】

龍呀

【あらすじ】

五大貴族と世界に呼ばれる程に権力、財力、魔力を持っている貴族であるアルベイン家。そんな家系に生まれてきたアシュト＝アルベイン。魔力は平民よりちょっと高い位だが、体術は平民並。しかも、魔力の高い妹と弟が生まれてきてしまい、只でさえ英才教育についてゆけない状況が悪化した。世間からの目は痛く、両親達は必死にアシュトに厳しくしていた。そんな毎日が続く中、とうとうアシュト＝アルベインの存在に堪えきれなくなつた者達が暗殺を実行する。その日を境に彼の世界は変わった。―― 本当の自分を見

つけてくれたのは、貴方だけだから……”

第一話 見慣れたはずの日常（前書き）

初めまして、龍呀と言います。上手くは書けませんが、よろしくお願ひします。

第一話 見慣れたはずの日常

「本日はここまでッ!!」

勇ましい声と共に一人の少年が崩れ落ちた。

「……やっと終わった…」

息絶え絶えとなり、今にも泣きそうな表情になりながらもそれを懸命に堪えて、床に俯せになる。

「アシュト様、この程度に苦労しては先が思いやられますよ…」

先程の勇ましい声の主が呆れを含ませながら、床に俯せたままの少年に語りかける。

身長も高く、程よい筋肉のついた黒髪、黒瞳の青年の表情は浮かない。

「このままではなりませんよ…」

「わかってる…」

少年も声には張りが無く、表情は浮かない様子だった。

しばらく、少年の様子を見ていた青年だったが、諦めたのか、溜め息を吐き、その場から立ち去った。

（…俺だって、強くなりたさ…！）

床に伝うは悔恨の涙。

（でも、でも——…）

どんなに泣いたところで現状を打破出来るわけでもない。まして、強くなることなどは出来ない。

…だが、堪えることも出来ずに涙は流れてくる。

（……ほんと、俺って泣き虫だなあ……）

魔法学科もろくに覚えることが出来ず、実戦でも何も出来ない。

貴族であるために必要なことが何一つ出来なかった。

そんな自分が不甲斐なく、泣かない日々などは無かった。

親も側近も自分のことは見限っている…。

それが、日常。

——見慣れた日常に伝う涙は、今も止めどなく溢れてくる。

それが彼——アシュト＝アルベインの日常だった。

第二話 終焉は唐突に（前書き）

え、今回は前半をコメディ風味に後半をシリアス風味に仕上げたつもりです。相変わらず、文字数少なくて申し訳ない（苦笑）それと、誤字、脱字、またはこうした方が良いのでは？というありがたいアドバイス等があったら、報告お願いします。

第二話 終焉は唐突に

「……………はあ……………」

夕焼けに染まる坂を登る中、肩をすぎるとこまで伸ばしたうつすらと金の入った髪を後ろで結び、蒼い瞳を伏せている少年——アシュト＝アルベインの姿があった。

「どうして、上手くないんだろ……………」

今日の学校での授業の内容を思い出し、苦笑を浮かべる。

平民からすれば、まずまずの出来栄であつたのだが、世界の貴族の中でも五本指に入る程の魔力を持った者達ばかりの『アルベイン家』では落ちこぼれ、と呼ばれても仕方がない出来栄であつた。

（……………いつそのこと、普通の家系だつたら良かったのに……………）

平民並の実力を持った彼にとっては毎日のように望んだ儚い願い。

だからといって今の両親が嫌いというわけではない。寧ろ、貴族として落ちこぼれな自分に対して期待を込め、厳しく教育してくれる両親には感謝してる。

腹が立つのは、そんな両親の期待に応えることの出来ない自分に対してだ。

魔力の高い妹や弟も出来て、普通の貴族ならばとつくの昔に見捨て

たことだろう。

実際、アシュト自身もそう思っていた。

しかし、それは誤った考えであつた。

妹と弟が出来てからの教育はさらに厳しくなり、両親の期待も窺えた。

「ふう、ちゃんとしなくちゃなあ」

色々と今までのことを考えていたアシュトだったが、やはり両親や情けない自分に対して優しく接してくれる妹、弟の気持ちを思い出し、頬を張って自分を叱咤した。

「ただいま！」

そう言つて、アシュトは見慣れた豪勢な家の中へ足を踏み入れる。

すると、中からは黒髪黒瞳の少し背の高い麗人とも呼べる青年が現れた。

「アシュト様、お帰りなさいませ」

「うんっ！早速で悪いんだけどさ、修行の準備してくんないかな？
エイゼル」

エイゼル、と呼ばれた青年は

「畏まりました」と微笑み、アシュトが身につけていた布製の鞆を受け取って奥の部屋へと姿を消した。

「今日は成功させなきゃね！」

そう意気込み、頭の中で反芻させているアシュトに二つの影が忍び寄った。

『お兄様ッ！！』

片やアシュトの胸の側に、もう一方はアシュトの腰に渾身の力を込めた抱擁を浴びせた。

勿論、喰らった本人は咄嗟のことに反応することが出来ずに

「へぎゃッ！！」っという音を発てて絨毯と熱烈な抱擁をしてしまった。

「……痛たたっ」

そう言いながら、立ち上がると自分と同じような髪の色をした少女と少年が抱きついていていた。

「もうっ！レイもアレンも痛いよ！」

レイ、アレンと呼ばれた彼らは渋々といったように離れる。

レイとアレンはアシュトの妹と弟であり、双子なためなのか、行動

が類似している。

レイは兄であるアシュトと同じ金髪を二つに結ぶ——所謂、ツインテールという髪型になっている。

アレンはアシュト程髪は伸びておらず、適度に伸びた金髪をふわふわと跳ねさせた髪型となっており、二人共にやんちゃな輝きを秘めさせたエメラルドグリーンの瞳をバツの悪そうにアシュトから逸らしている。

「だって、お兄様最近遊んでくれないんですもの……」

「僕達、寂しかったんですから……」

瞳を潤ませて、俯く二人。

こうなると、流石にそれ以上は淒むことの出来ないアシュト。

「うつ……！はあ、悪かったよ、ゴメンね？」

そう言うと、俯いていた顔を上げてアシュトに抱きつく二人。

アシュトは脱力したように二人の頭を撫でていた。

「アシュト様、準備が整いました……っと、レイ様とアレン様も御一緒でしたか……」

恐らく修行の準備が出来たのであろう、エイゼルがアシュトの前に現れた。

レイとアレンは気持ち良さそうにアシュトの膝の上に頭を乗せて寝ている——所謂、膝枕の状態だ。

「ゴメンね？修行は夜にしてくれないかな？」

バツの悪そうに頭を下げるアシュトに対してエイゼルは優しく微笑む。

「ハハッ、構いませんよ。その分、キツくなるとは思います…」

「ハハハ、死なない程度に頼むよ」

そう言うと、

「では、私はこれで失礼致します」と言ってエイゼルは姿を消した。

「さて、と…」

起きないように二人の頭を優しく持ち上げてクッションの上に置く。

ふと、外に目を向けると家に入った時は夕暮れだった空もすっかり暗くなっていた。

「今から、修行はキツいなあ…」

等とぼやきながらもしっかりと立ち上がり、昨日エイゼルに散々と

言われてしまった闘技場へと向かう。

（修行の時のエイゼルは厳しいから、怖いんだよなあ…）

そう、普段のエイゼルならば多少のことは見逃してくれるが、修行時のエイゼルは厳しく接してくる。

…というのも、情けない自分に渴を入れて強くなってもらいたい一心なのだが、それを受けている本人にとってはかなりショックを受けてしまうのでキツイ。

気が付くと、闘技場へ向かっていたつもり足取りが別のあまり近寄らない場所へと踏み入れていた。

一応敷地内ではあるが、暗いと不気味なので早々に立ち去ろうとするアシュトの前に複数の影が立ち塞がった。

月明かりのみなので、顔までを見ることが出来ずに少し戸惑うアシュト。

判断出来るのは、人数が四人程ということと皆、男であるということだろうか。

「……誰？」

単純な疑問をぶつただけであったが、それが合図になったかのよう
に男達が動いた。

一番近くにいた男はあっという間にアシュトとの距離を潰し、鳩尾
に一発拳を擦り込んだ。

「がっ！」

正確に鳩尾に打ち込まれた為に、ろくに声を挙げることも出来ずに
倒れ込もうとするのをもう一人のガタイの良い男が担ぎ上げる。

アシュトを担ぎ上げた男の近くにいた細身の男は面白く無さそうに
息を吐く。

「フンッ、この程度にも反応出来ないのか……」

担がれているアシュトに対して冷たい視線を送り、それから周りを
警戒するように見渡す。

「気づかれない内に逃げるぞ！」

『御意』

そう言うのと、男達は一斉にその場から消える。

「……んっ…？」

アシュトが目覚めたのは、海が見える展望台。

「どうだ？いい眺めだろ？」

見知らぬ声に驚き、声のした方を見ようとするが、上手く動くことが出来ずに自分自身の体の違和感に気づく。

「ハッ！とんだ間抜け面だな」

なんとか、声のする方に体を向けるとそこには自分を冷たくせせ笑う二つの紅瞳があった。

「君…は……？」

「俺のこともわかんねえのかよ、アシュト＝アルベイン」

疑問をぶつけると憤りを籠めた口調で返された。

（紅瞳にあの藍色の髪…。おまけにツンツンと立った髪型、もしか

して――」

「――っ、『ガイル家』のイザルク!! ガイル…君?」

そうアシュトが聞けば、目の前の男は笑い出した。

「こんな状況なのに君付けかよ!…本当に間抜けだな」

一通り笑い終えたのだろう、再び冷たい視線をアシュトに向けた。

「そうだよ。死ぬ前なんだからなっ、不憫だから教えといてやるよ」

――
”死ぬ”

彼の口から聴こえたのはつきりとした言葉にアシュトは背筋が冷たくなつた。

「わかつてると思うが、俺はお前の存在がムカつく。…どうしてかわかるかな?」

苛立ちと不快感を全快にした口調と顔色にアシュトは理解した。

『ガイル家』というのは、『アルベイン家』より少し下の貴族だ。

五大貴族としても名高い。

ようは――

「俺が落ちこぼれ、だから……？」

本人の口から聴けたのが嬉しいのか、イザルクは満面の笑みを浮かべる。

「ピンポン！大正解ッ！……じゃあ、これから何が起こるか位、わかんたろ？」

先程言われた”死”の宣告。

そして、イザルクの周りにいる屈強そうな男達。

…嫌でも先がわかってしまった。

「ハハハ、安心しろよ。死にそうになったら、その海に棄ててやるからさ！」

（…短かったな、俺の人生）

諦めの色を露にするアシュトを眺めてから、イザルクは鳩尾に一発叩き込む。

抵抗出来ないアシュトは込み上げてくる物を吐き出し、咳き込みもうとするが、有無を言わずに第二、第三の拳が叩き込まれる。

そこからは殴る、蹴るの暴力という名の力による支配だった。

もう何回殴られたか、蹴られたかわからなくなってきた頃に永遠に続くかと思われた支配は突然に止んだ。

アシュトの自慢の髪は薄汚れ、蒼い瞳には生気が感じられない。

それでも彼の意識はトブことはなかった。

——いつそのことトんでしまえばどれほど楽だっただろうか。

「そろそろ死に時だよな、なのに、意識があるなんてとんだ変態野郎だなっ」

殴る、蹴るの行動により、スッキリとしたのだろっ、満足そうに微笑むとアシュトの襟元を掴み、海の近くまで引き摺った。

「んじゃさ、お前んとこの執事にそろそろ感ずかれるかしんねえからお別れだわ」

そう言つと、後ろにいる男達に視線を投げ掛ける。

…男達は無言でアシウトを持ち上げ、渾身の力で広大な海へと投げ入れた。

「まっ、彼処までいきや魔物に食われて死ぬだろ、御愁傷様！」

魔物——文字通り魔力を持った生物のことを言う。

長い月日を経て魔力を溜めた動植物は変化をし、魔物へと姿形を変えらる。

悪い魔物だけになるわけではないが、動植物の殆どは人間を恨んでいるわけで、魔物になつた動植物は人間を襲う。

勿論、海とて例外ではなく魔物が存在している。

只でさえ、動けないという状況の中、そんな危険な海へアシウトは白い水飛沫を上げて消えていった。

第二話 終焉は唐突に（後書き）

どうでしたでしょうか？相変わらず意味がわからなかったことでしよう、俺もです（笑）さてさて、これからまだまだキャラクターが増える予定なんでメインっぽいキャラだけ覚えて頂けると助かります（笑）

第三話 目を開けるとそこには…（前書き）

今回もまた謎な点が多数身請けられると思いますが、どうか最後までお付き合い願います。

第三話 目を開けるとそこには…

「……ッ！」

身体中に激痛が走る。

身体を起こそうにも動けずに金色の少年——アシュト＝アルベインは目を開けた。

（お、俺は……？）

起きることも出来ず、今の状況を理解しようにも頭がついてこなく、困惑しているアシュトに声がかかった。

「おやおや？その傷でよく生きていましたね。運良く私が海の側を通った際に貴方がいたわけですが…」

声で男だということにはわかった。

不思議と心地好い声で、アシュトはつい聴き入ってしまった。

声の主は此方が動けないということに気付いたらしく、足音が迫ってきた。

アシュトの目に映ったのは風に靡く（ナビク）銀色——。

肩まで伸びている髪を後ろで結び、自然と美しい——と思ってしまった。

「やはり、その傷ではまともに動くことは叶いませんか…。治してあげたいのは山々ですが、回復系は私の専門外でしてね」

困ったように微笑む男に対して、ようやくアシユトは口を開いた。

「あ…なた…は？」

口が上手く開かずに途切れ途切れになってしまったが、相手は意味を理解してくれたらしく、頷いた。

「当然の疑問ですね。…そうですね、魔族とでも言うておきましようか」

微笑む男の口から聴こえた単語——魔族。

その名の通り魔法を使う為に必要な魔の力を人間の数十倍は秘めている種族だ。

魔族といっても多様な種族があり、一概に同じとは言えない。

「魔…族、…あつ…」

男の言葉を反芻した際に見てしまった衝撃の色。

銀髪にばかり気を取られていたが、その前髪の下には紅と蒼の宝石のような瞳。

——所謂、オッドアイだ。

「おやおや、見てしまいましたか、…やはり恐ろしいですか？」

見られた男は哀しげに微笑む。

「……………れ…い」

「えっ？」

蚊が鳴くような声で呟いたアシュトに対して、聞き返す。

「綺麗……………です」

感嘆するように再度呟いたアシュトの言葉に男は目を見開く。

「本気で言っているのですか…？」

魔族にすら言われたことが無い言葉。

——恐ろしい、災い、呪いの瞳…このような言葉しか投げ掛けられたことの無いこの瞳に対してこの少年は何と言ったか。

——
”綺麗”

嫌われていたこの瞳に対してそんなことを言ったのは、彼や自分の唯一の相棒位だった。

「本当に綺麗…だと思います」

「面白いことをいいますね、貴方は。…そうですね、お礼と云っては何ですが、この瞳についてちょっとだけ教えましょう」

そう云ってアシュトに顔を近づける男。

「この瞳は魂の色が見えるんですよ」

「魂の…色…?」

いきなり言われた訳の解らない言葉に困惑するアシュト。

「そう。まあ早い話がその人の人物像が判るというわけです」

「…?」

続けられた男の言葉についていけずに——それでも必死についていこうと男の話に耳を傾ける。

「私は生まれてこのかた純粹な白の魂を持つ人間を見たことがありません。しかし…」

そこで一旦区切り、アシュトの方を向く男。

「——貴方の魂の色は白です。混じり気の無い純粹な白…」

男の表情は真剣なものとなり、アシュトを射抜く。

「私は貴方に興味がある、………どうです?ここで出逢ったのも何か

の縁。——一緒に来ませんか？」

「——えっ？」

いきなりのことに戸惑う。

……だが、何故かアシュトは男に着いていきたくなくなってしまった。

「嫌というのならば、貴方を家まで送りましょう。見たところ貴族の方のようですね、帰るならば今のうちですよ」

思い出すのは、厳しく接してくれた両親、優しくも厳しかったエイゼル、甘えん坊なアレン、レイ。

家族とは別れたくない。

しかし、今出逢ったばかりの彼とも離れたくはなかった。

「大分、悩んでいるようですね。……こうしませんか？しばらくは私と一緒にいてきてください、帰りたくなったらならばその時に送ります」

そう言つて、男はアシュトを抱き抱える。

「ちょ、ちよつと……！」

さすがに恥ずかしくなり、抗議の声を挙げるが、優しく微笑まれる

だけだった。

「貴方は怪我をして動けないから仕方ないでしょう？」

反論しようとしたアシュトだったが、全身に迸る（ホトバシル）激痛と彼の背中 of 気持ち良さに反論出来なくなった。

「……一つだけ教えてください……」

「はい、なんででしょう？」

ずっと聞きたかったこと、タイミングがわからずに聞き逃していたが、今がラストチャンスだった。

「貴方の名前は？」

「私はゼイブⅡシェイン……」

そこで一旦区切り、アシュトの方へ顔を向ける。

「——バンパイアです」

それがアシュトⅡアルベインとバンパイア——ゼイブⅡシェインと

の出逢いだっ
た。

第三話 目を開けるとそこには…（後書き）

どうでしたでしょうか？ここから彼の世界は変わっていく予定ですが、いかんせん長く書くことが出来ない（泣）能無し作者を許してください…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7283g/>

あの日世界は鮮明に――

2010年10月14日12時03分発行